

二条大路木簡

平城宮跡発掘調査部

1988年8月末の長屋王家木簡の発見からほどない翌9月、第193次B区調査において、長屋王邸北側の二条大路南端に、当初は二条大路南側溝と考えていたSD5100を検出し、ここから大量の木簡が出土し始めた。その後の第197次・第200次両調査によって、SD5100は左京三条二坊八坪の北側に沿って延びる幅2.6m、深さ0.9m、長さ120mに及ぶ東西両端の閉じた長大な溝状の遺構であることが判明し、1989年夏の第200次補足調査も含めてほぼ完掘した。さらに、第198次調査B区においてSD5100と二条大路を挟ん

1989年度木簡出土遺構と点数

出土遺構	点数
二条大路南端の東西大溝 SD5100	約15,000点
二条大路北端の東西大溝 SD5300	約30,000点
二条大路北端の東西大溝 SD5310	約100
二条大路北側溝 SD5240	39点
三条二坊八坪の南北溝 SD4750	約50,000点
東二坊坊間路西側溝 SD4699	511点
東二坊坊間路西側溝 SD5021	160点
二条二坊五坪の SX5472	1点
二条二坊五坪の SX5473	1点

(点数は昨年度以前出土のものと同算したもの)

でちょうど対称の位置、二条大路北端にも同様の溝状の遺構SD5300を検出、同調査及び第204次調査においてこれを完掘し、やはり大量の木簡を取り上げた。SD5300は幅2~2.3m、深さ1~1.3m、長さ56mで、左京二条二坊五坪南面中央の門の前で一端途切れるが、門の西側から同様の溝状の遺構SD5310が新たに始まり、その東端約6mを調査した。

SD5100・5300・5310の3条の溝から出土した木簡は内容的に強い関連があり、合わせて「二条大路木簡」と仮称している。長屋王家木簡、二条大路木簡と大木簡群の発見がこれだけ短期間に相次ぎ、しかも近接した地域から集中して見つかったのはまさに驚異的であり、両木簡群が今後の木簡の研究、ひいては日本古代の研究に資するところは誠に計り知れないものがある。なお、1989年度に木簡が出土した遺構は表の通りであるが、ここではSD5100・5300・5310出土の二条大路木簡に限って取り上げることにする。

二条大路木簡の特徴 二条大路木簡の全容は、まだ整理の途上にあるため完全に解明されていないが、これまでに得られた知見からその全体的な特徴をまとめておこう。

第一に、その数量の多さである。最終的には5万点前後に達するものと考えている。長屋王家木簡の発見以前の木簡出土が平城宮で約33,000点、それ以外の全国で同じく約32,000点であったことを考えれば、その意義は自ずと明らかになる。数量的な面だけでも長屋王家木簡に匹敵するか、それ以上の史料群となることは間違いない。

第二に、平城宮外出土にもかかわらず、平城宮内の木簡に非常に近い形状・内容・様式のものが多いことである。個人の邸宅内の木簡が主体の長屋王家木簡とはかなり様相を異にする。

第三に、二条大路の上に掘られた溝状の土坑という、これまで全く例をみない遺構からの遺

物であるという点である。このことは、複数の場所からの遺物が混入し得ることを意味し、二条大路木簡を解明していく上で大きなネックともなる事実である。

第四に、天平7・8年のものを中心に比較的限られた年紀を持つものが集中していることである。年紀の最も新しいものは木簡では天平11年、墨書土器では天平12年であり、天平9年の疫病の流行や天平12年末の恭仁遷都との関係が考えられる。

文書木簡 (1～3, 8～11, 17) 次に、内容別に概観する。まず文書木簡について。8は明確な宛先を記すほとんど唯一のもので、宛先の兵部卿藤原麻呂の家政機関で廃棄されたと判断され、二条大路木簡には藤原麻呂の家政機関の木簡が含まれていると考えている。その他では、「某進」の様式をとる進上状の多さが目立つ(9, 17など)。差出しには園池司・左京職・右京職・西市などの官司の他、池辺御蘭司・南園所・意保御田・岡本宅・南宅・宇太御廐・樺本三宅・佐紀瓦司・越田瓦屋などがみえる。同じく個人の家政機関宛の進上状でも、「長屋王家木簡」の進上状が蔬菜類を中心としているのと対照的である。これらの御田・御蘭などのうち岡本宅のみは正倉院文書に皇后宮職系統の写経所との經典の貸借文書を残すが他は初見で、「長屋王家木簡」にみえるような個人の家政機関に関わるものなのか、公的な施設なのかは俄には決めがたい。この他に木簡にみえる官司としては、兵部省・大膳職・主殿寮・大炊寮・木工寮・官奴司・中衛府・左右兵衛府・豎子所などがあり、宮内省被管の官司が多いのが目立つ。

荷札木簡 (4～7, 15・16) これまでに約400点の荷札木簡が確認されている。貢進国はほぼ全国にわたり、品目もバラエティーに富んでいる。特に注目されるのは、贅の木簡が多量に含まれることで、中でも参河国播豆郡の篠島と析嶋の贅の荷札(種々の魚の楚割)は40点近くにも達する。近辺に天皇と密接に関わる施設があったのか、それとも一旦天皇に貢進されたものが臣下に分配されたものなのかは即断できないが、贅貢進の根本にも関わる重要な史料群となろう。駿河・伊豆(調堅魚)、安房(調鰻)、近江(庸米)、若狭(調塩、種々の海産物の贅)、隠岐(種々の海産物の調)などの諸国の木簡も多い。中でも伊豆国は60点にも達し、従来知られていた数の実に3倍にも及ぶ。なお、16は個人宛の荷札の数少ない例の一つである。

その他の木簡 門の警備を担当する人名を書き上げた木簡(12)、宿直者を書き上げた木簡(13)、食料支給の木簡(14)など、いわば帳簿木簡とも呼ぶべき木簡がまとまって出土している。

2つの木簡群 ところで、木簡の内容と出土地域の間には密接な関係がある。特に顕著なのは、左京二条二坊五坪南面中央の門と不可分の位置関係にあるSD5300西端とこれに向かい合うSD5100の中央部分で、ここに分布する木簡は二条大路木簡全体からみると特殊な傾向を示している。顕著なのは、種々の進上状、宿直木簡、及び食料支給木簡であり、反面荷札木簡の出土は少ないものの、他の地域にはみられない近江国坂田郡上坂(田)郷の庸米の荷札がまとまって出土しているのが目を引く。8はここから出土したものであり、これらも藤原麻呂の家政機関から投棄されたとみてよからう(以下、これを第一の木簡群と称す)。二条二坊五坪南面中央の門との密接な位置関係からみて、東院南方遺跡の一郭に藤原麻呂邸を推定することができる。

但し、藤原麻呂の家政機関に関わるとはいても、単純には個人の家政機関内で完結する内容ではなさそうである。10・11・13にみえる六人部諸人に着目すると、彼が所属する麻呂の家政機関が『続日本紀』にみえる天平8年6月から7月にかけての聖武天皇の芳野行幸に関わっていたことが知られ、麻呂の家政機関が麻呂の職務に関係する公的な役割を担っていたことがわかる。

次に顕著な分布を示すものとしては、SD5100西端の旧長屋王邸北門脇に集中する一群がある。荷札木簡が大量に分布し贅の荷札も数多くみられる。大膳職のものと考えられる木簡や大命と記す木簡、東大寺の前身の金鐘山房からの解(2)も含まれており、聖武や光明に関わりの深い木簡群といえよう(以下、第二の木簡群と称す)。SD5100東端もほぼ同じ傾向を示している。

第二の木簡群の廃棄場所については、その出土位置からも南側の三条二坊八坪の旧長屋王邸の可能性が考えられるが、注目すべきは12などの門の警備に関わる木簡である。平城宮西宮兵衛の木簡との類似から、門の警備を担当する兵衛などを書き上げたものと判断される。ところで、SD5100西端や東端、及び東二坊坊間路西側溝SD4699からは、中衛府や左右兵衛府に関わる墨書土器が見ついている。あたかも長屋王邸を取り囲むような形で出土しているわけで、これらは長屋王の変後にここに駐屯した軍隊、ないしは旧長屋王邸跡地に設けられた何らかの施設に関わるものである可能性が高い。従って、第二の木簡群も旧長屋王邸に設けられた何らかの施設に関わる可能性が高くなり、長屋王没後の跡地利用を考える上でも、貴重な材料になることが期待される。但しその決め手となるような木簡はまだ見つかっていない。

今後の課題 長屋王家木簡と二条大路木簡の発見によって、木簡の出土点数は飛躍的な増大をみた。良質のしかも量的にまとまった材料を得て、日本古代の木簡の研究は今新たな出発点に立っているといても過言ではなからう。その全貌の一日も早い説明が待たれるところである。

二条大路木簡の全体像を考える上での大きな課題は、第一の木簡群と第二の木簡群の関係である。第一の木簡群が北側の二条二坊五坪から、第二の木簡群が南側の三条二坊八坪からそれぞれ投棄されたとすれば、両者がいかなる関係のもとに捨てられたのかが重要な論点となろう。換言すれば、藤原麻呂ひいては藤原四兄弟(第一の木簡群には藤原武智麻呂宛と考えられる16のような荷札も含まれている)と長屋王邸跡地との関わり方の問題でもある。両木簡群を残した施設は互いに強い関連を有するものであった可能性は高い。長屋王邸跡地から捨てられたものに公的な色彩の強いものが多いという事実をどう理解するか、大量の贅を消費し、中衛や兵衛が警備し、宮内省被管の官司が密接に関わる施設とはいったい何なのか、そして藤原麻呂の家政機関が関与する芳野行幸とこの施設との関わり、藤原麻呂邸が純粹に私邸であるのか否かなど今後に残された課題は大きい。これらの課題を解く鍵は、同じ遺構から出土した大量の木製品・土器・瓦などの遺物の分析とともに、長屋王邸跡地から捨てられたと見られる第二の木簡群の説明にかかっているといえるだろう。二条大路木簡は長屋王没後の跡地利用と密接に関わる木簡群であり、その意味ではすぐれて政治史的な所産でもあるのである。(渡邊晃宏)

